

国際サンゴ礁イニシアティブ (ICRI) 総会 (東京)

< 議長総括 >

2007年4月23日及び24日に東京・池袋にて、国際サンゴ礁イニシアティブ (ICRI) の総会が、15か国の代表、22の国際機関、NPO団体、大学など世界の各国から65人の参加を得て開催された。本総会での議論の主な内容は以下のとおり。

< 新メンバー >

- ・ SCRFA (The Society for the Conservation of Reef Fish Aggregations : サンゴ礁魚類集団産卵保全協会、本部：アメリカ) が新たに ICRI メンバーとなり、参加者から歓迎の意が述べられた。
- ・ ツバル、中国、日本サンゴ礁学会、国際熱帯木材機関 (ITTO 本部：横浜) 及び国際マングローブ生態系協会 (ISME 本部：那覇) がオブザーバーとして出席した。

< ICRI の活動のレビュー >

- ・ ICRI の今までの活動をまとめた「ICRI 活動のレビュー」が全会一致で採択された。
- ・ その中では、ICRI の積極的な活動によりラムサール条約や生物多様性条約等の締約国会議や国際的な議論の中で「サンゴ礁の保全」が多く取り上げられるようになった等の成果や、今後 ICRI を、サンゴ礁に関する専門的枠組みとして強化していくため、さらに参加国、参加団体を増やしていくとともに、関係機関や関係条約事務局等との連携を強化していく努力が必要等についての認識が示された。

< 国際サンゴ礁年 >

- ・ 2008年の「国際サンゴ礁年」に関する ICRI、各国、各団体等の活動計画について議論がなされ、フランス、日本、アメリカからサンゴ礁保全に関する教材や、様々な関連する主体を巻き込んだ国内組織の立ち上げなど、現時点での進展状況等について報告があり、さらに教育関係者、マスコミ、企業及び漁業、観光業に関する国際・国内組織等とも、より密接な連携を図っていく必要があるとの提案があった。今後、アドホック・コミッティーを作り、これらの提案を踏まえて「国際サンゴ礁年活動計画」を作成していくこととなった。
- ・ 「国際サンゴ礁年」に関連する国際会議として、G8環境大臣会合 (日本)、第9回生物多様性条約締約国会議 (ドイツ)、第10回ラムサール条約締約国会議 (韓国) 等においてサンゴ礁保全に関するテーマが取り上げられるように、働きかけていくとともに、各地域ごとに、地域間会合を開催していくこととなった。また、国際サンゴ礁シンポジウム (フロリダ) や国際サンゴ礁保護区ネットワーク会議において、国際サンゴ礁年の議論を深めるとともに、サイドイベント等により、より広く周知を図っていくこととなった。
- ・ また、「国際サンゴ礁年」の統一ロゴとして日本が提案したものが採択された (別添資

料2) 今後、各国、各団体は、このロゴを「国際サンゴ礁年」の広報等に積極的に使用していくこととなった。

<海洋保護区のネットワーク> *別添資料3(英文勧告文) 別添資料4(和文仮訳勧告文)

- ・ 「2012年までに、海洋保護区のネットワーク構築を図る」というWSSD(2002年)の決議に対応し、いくつかの地域においては進められてきているネットワーク化の取り組みをさらに進展させるために、エコロジカル・クライテリアを適用するとともに、既存のデータベースを活用しつつ、まだ保護されていないネットワーク上重要な箇所を補足しながら、ネットワークを形成していくなどの取組を、各国、各団体が進めていく旨の決議が採択された。
- ・ 東アジア(14カ国)とミクロネシア(5カ国)地域において、海洋保護区ネットワークデータベースの作成を行っており、これまでに国際的に十分に把握されてきていなかったこの地域における海洋保護区が400余り設定されている旨日本から報告があり、既存の保護区データベースとの連携を図ることが議論され、サンゴ礁保護区ネットワークの強化・充実の目的で、「2008年にサンゴ礁保護区に関する国際会議を日本が開催する用意がある」旨日本から提案があり、各国から歓迎された。

<気候変動とサンゴ礁> *別添資料5(英文決議文) 別添資料6(和文仮訳決議文)

- ・ 昨年10月の国際熱帯海洋生態系管理シンポジウムにおける「サンゴ礁と気候変動に関する声明」及び本年4月6日に発表されたIPCC第二作業部会の報告等を踏まえ、地球温暖化に伴う海水温の上昇がサンゴ礁に与える影響及びそれへの対策等について活発な議論が行われた。
- ・ この結果、すでに気候変動が、サンゴ礁生態系に対して大きな脅威となっており、今後さらにその影響が生じることや、サンゴ礁を維持していくために、気候変動緩和のための活動が必要であることが確認された。
- ・ このため、「良好な水質、健全なサンゴ礁の広がり、藻食魚類を含めた生物の多様性を維持するとともに、各地域におけるステークホルダーと連携して、サンゴ礁へのストレスを減少させ、サンゴ礁の気候変動に対する回復力(resilience)を高めること」、「気候変動に対する回復力に関する研究の促進」、「気候変動による損失を受ける沿岸住民の持続的な生計への支援」及び「気候変動によるサンゴ礁への影響について一般に周知を図ること」の4項目をICRIメンバーに求める決議がなされた。

<海洋の酸性化>

- ・ 大気中の二酸化炭素の増加に起因して進行しつつある海洋の酸性化がサンゴ礁の造礁活動を阻害している等サンゴ礁生態系へ悪影響を及ぼしていることや、それへの対策等について活発な議論が行われた。
- ・ 当分野における科学的な調査研究や普及啓発の必要性が指摘され、「サンゴ礁と酸性化に関する勧告」が、基本的に合意されたが、詳細な文言については今後調整されることとなった。
- ・ 本勧告内容の実施については、アドホック・コミッティーを立ち上げて行うこととし、

日本がその取りまとめ役を果たすこととなった。

< マングローブ >

- ・ 国際熱帯木材機関 (ITTO) から、熱帯雨林の保全プログラム、特にサンゴ礁保全と深い関係のあるマングローブ保全に関するワークプラン (2002-2006) の説明があり、サンゴ礁保全とマングローブ保全は共に進めていくべき関係にあり、ICRI と連携を図っていく必要がある旨説明があった。また、国際マングローブ生態系協会 (ISME) から、マングローブ保全のためのトレーニングコース、世界各国のマングローブデータベース、インドネシアの津波被害に対するマングローブ植林の支援プログラム等に関する報告があった。これに対して、日本から、「国際サンゴ礁保護区ネットワーク会議」においてもマングローブ関連団体や機関の参画を得たい旨発言があった。
- ・ ICRI においてマングローブに焦点を当てた実質的な議論が行われたことは今総会が初めてであり、今後ともマングローブの保全に関する団体や機関と ICRI との間で情報交換・対話を継続していく必要があることが強調された。
- ・ 短期的には、国際サンゴ礁年でのメッセージの発出や、ICRI サンゴ礁報告書 (2008) に、マングローブを含めることや、より長期的には、マングローブのモニタリングネットワークの構築に協力していくなどの様々な提案がなされた。

< サンゴ礁の経済的価値 >

- ・ サンゴ礁の経済的価値について、ブレイクアウトセッションにおいて議論が行われ、経済的側面からのサンゴ礁の価値に関する知見の重要性について認識が持たれ、今後どのように検討を行っていくかについて議論が行われた。

< 事務局引継ぎ >

- ・ 日本とパラオとの共同事務局の任期は本年6月までであり、7月からはアメリカとメキシコとが共同で事務局を担当することとなった。日本・パラオからアメリカ・メキシコに対して事務局の引継ぎが行われた。
- ・ 参加者の多くから、日本とパラオの過去2年間の貢献に対して感謝の意が表されたとともに、アメリカとメキシコに対する歓迎と期待の意が述べられた。
- ・ アメリカ・メキシコより、次回会合を2008年1月に開催し、国際サンゴ礁年の世界的な立ち上げも併せて行うこととしたいと発表された。